茅野市のお宝再発見
～生産量日本一の角寒天～

茅野市が全国に誇る特産品である”角寒天”について、平成30年1月14日、宮川西茅野区の寒天生産工場である「株式会社マルゴ商店」に出向き、代表取締役の五味徳雄さんからお話を伺いました。
（取材を基に独自調査分も記載しています。）

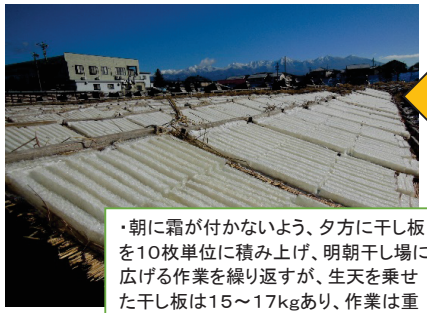
・寒天の原料のテングサやオゴノリは、国内では伊豆・愛媛など、海外では、韓国・インドネシアなどから購入。
・品質の良い国産原料をたくさん使った寒天ほど高級品。

・1日水に浸して柔らかくする。
・ミキサー車を改造した回転するドラムを使って海藻を洗浄する。
・さらに水に漬けて「あく」を抜く。
・洗浄する水は地下水を汲んでいる。

・テングサなどを釜に入れ、2時間ほど煮て半日置いた後、煮汁を布で濾(こ)し、ホースでモロブタ（青色の四角い箱）に分け入れて棚で冷ます。

・1時間半ほどで固まった生天を天切り包丁で22本程に切り分ける。
・切った生天を藁(わら)の筵(むしろ)を敷いた干し板に並べて干す。

・乾燥を早めるため、くしのような道具で生天をついて無数の穴を開ける。
・明け方のマイナス10度近くまでの冷え込みと昼間の日差しとの寒暖差10度以上になる気象状況を利用し、凍結・融解・乾燥を繰り返して水分を抜く。



・朝に霜が付かないよう、夕方に干し板を10枚単位に積み上げ、明朝干し場に広げる作業を繰り返すが、生天を乗せた干し板は15～17kgあり、作業は重労働。
・天候が順調なら約2週間で完成する。

・角寒天を簀（す）に乗せ換え、ビニールハウス内で完全乾燥させて製品となる。
・一束は約600本で、マルゴ商店では、1日約1万3千本、1シーズンに約80万本を生産する。

安国寺から金沢が角寒天の主産地になった理由
・昔は八ヶ岳山麓でも角寒天づくりをしていたが、南アルプス水系の地下水は鉄分が少なくて八ヶ岳水系の地下水より角寒天づくりに適した水質で、水量も豊富であり、西山に日が早く入るため、日照時間が短くて午後の冷え込みが早く、自然環境に恵まれていた。
・昔の西茅野地区は、冬になると田の全部が1枚残らず寒天の干場となったほど角寒天づくりが盛んだった。

寒天生産の歴史
寒天は、およそ350年前に京都で初めて発明された食品で、190年ほど前（江戸天保年間）に、玉川穴山の小林粂左衛門が、京都の丹波地方で寒天製造を知り、気候風土が諏訪地方と同じことから農家の冬の副業として適していると考え、製法を持ちかえって寒天製造を始めた。
穴山には、「信州寒天元祖の碑」が建立されている。

寒天生産の現状と課題
・諏訪地方の寒天生産業者は、最盛期の昭和14年には245軒あったが、現在は11軒、生産量は約1200トンあったが、現在では約90トンに激減している。
（長野県寒天水産加工業協同組合調べ）
・食生活の変化などにより、寒天の需要が減っている。
・角寒天生産は、12月中旬から2月中旬ころまでの、極寒時期の約60日間であるが、地球温暖化の影響で生産に適した期間が短くなる傾向にある。
・農業の衰退により、水田の宅地化や工場化が進んで、良好な干し場である水田が減少。
・干し場に埃がたたぬように敷く稲わらについて、稲作農家減少の中、マルゴ商店では稲わら確保のために稲作を代行している。

茅野市のお宝再発見
～市花であるりんどう～

茅野市の市花に選定されている”りんどう”について、平成30年10月8日、湖東笹原区でりんどう生産をされている「農事組合法人ささはら営農」に出向き、りんどう栽培担当者の両角幸彦さんからお話を伺いました。
（取材を基に独自調査分も記載しています。）

・かつて長野県は、全国で2位の生産量を誇っていたが、現在の全国順位は
1位　岩手県　　2位　秋田県　　3位　山形県
4位　福島県　　5位　長野県
（農林水産省HP「平成28年花き生産出荷統計」より）
・りんどうは高冷地の花のイメージがあるが、長野県以外の主要産地では、低地での栽培が中心なのだそう。

・茎が曲がると商品価値が下がるので、まっすぐに成長させるために枠を組んで育成し、約150cmまで成長させ、約85cmに切って出荷する。
・風の影響を受けると曲がってしまうため、風対策などの栽培管理に苦労が絶えない。

・りんどうの天敵は「ダニ」。葉に付着して黄色くさせて商品価値を下げるので、殺虫剤散布などはかかせず、それが大変な労力。
・主産地の岩手県や秋田県は、積雪が多いのでダニが雪の重みで窒息死して越冬できないなんて話も・・・。

1年目のりんどう
（花のピンクは品種固有の色）
草丈が伸びて2年目から出荷となり、4年目まで出荷できる。成長が楽しみ。

茅野市のりんどうが主産地になった理由
・冷涼な気候で育ったりんどうは、色鮮やかで花持ちがいいと市場評価が高い。
・出荷時期が他の産地と競合せず、市場での値崩れがなかった。

りんどう生産の歴史
昭和20年代に米沢で野生のりんどうをもとに栽培が始まり、栽培法の確立や品種改良して高品質のりんどうを生産し、生産量が拡大した。
米沢北大塩には、「りんどうの里」碑が建立されている。

りんどう生産の現状と課題
・かつて茅野市は、長野県内で上田地方と2大産地を形成していて、茅野市内で180ヘクタールもの栽培面積を有していた。
・りんどうは他の作物より栽培に労力がかり、連作障害が発生したため、評価が高い他の花や他の作物へ転換するなどにより栽培面積が激減した。
・地球温暖化の影響を受けて、他産地の出荷と競合し始めている。